

Title	日英における移動と衝突：柳、柳田、スコット、リーチの交錯の例から
Author(s)	橋本, 順光
Citation	
Issue Date	2013-03-25
Text Version	publisher
URL	<a href="http://hdl.handle.net/11094/27378">http://hdl.handle.net/11094/27378</a>
DOI	
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

## 日英における移動と衝突—柳、柳田、スコット、リーチの交錯の例から—

橋本順光

### まえがきにかえて 諜報と教育

本報告書の経緯について簡単に説明したい。副題にある諜報と教育というとりあわせは、奇をてらった取り合わせと思われるかもしれない。当初、漠然と考えていたのは、イギリス帝国史の専門家をお招きして、日英の比較文学を学ぶ私たちと討議を行ってみたいという単純なものだった。準備を進めるなか、移動とその記録が、双方の異なった方法を生かせる共通分野として浮かび上がるようになった。ちょうど旅行記が記録であると同時に文学でもあるように、その分析には歴史と文学という双方の研究が不可欠といえるからである。

実際、サイドは『オリエンタリズム』のなかで多くの旅行記をとりあげ、旅行者による何気ない紀行文が、インフォーマントの協力により有益な情報を帝国の学知に編入する地誌作成の作業と連続していることを指摘した。そして皮肉な見方をすれば、教育はそうした情報と学知の基盤形成という側面をもっている。諜報というと扇情的だが、英語のインテリジェンスが情報と諜報を意味するように、諜報も教育も、移動をめぐる知の覇権闘争という点では同じ平面に置けるのではないか。もちろん、極論すれば諜報を教育として、あるいは教育を諜報としてとらえることも可能だろう。それはあらゆる活動がプロパガンダとして解釈できることと同じで、公共性をどのようにとらえるのかという問題こそがむしろ重要なかもしれない。しかし、本ワークショップではそうした公共圏をめぐる地政学そのものよりも、そうした覇権闘争を切り口とすることで、移動の記録を新たに読み直すことに重点を置いた。

### 柳宗悦の未投函の手紙 ロバートソン・スコットへの反論

このとき思い浮かんだのは、柳宗悦が英語で記した苦言である。それは1916年2月12日付け、ロバートソン・スコットという英国人宛の手紙に見られる。もっとも、柳は投函せずに手元に残していたため、スコットが実際にその手紙を目にしたのかどうかはわからない。それは今日の言葉でいえばよくあるオリエンタリズム批判というべきもので、日本人に文明や文化を教育しようとする父権的な態度、そしてそんな上下関係を疑問に思わない無神経へのいらだちが綴られている。それが熱のこもった調子で厳しい言葉が続く長大な手紙のため、おそらく投函するのをためらったのではないと思われる。ここで注目したいのは、そうした批判の筆頭に立つのが旅行記であることだ。ロティからキップリングまで、日本にやってくる旅行者が表面的な観察を積み上げる

ばかりで何も言っていないに等しいと、柳はいらだちも露わに嘆いている。そして、そんな旅行者と対比する形で、魂に触れようとして日本人の内奥にわけいっていったラフカディオ・ハーンという例外を挙げている。ただハーンは1904年に逝去しているため「旧日本の通訳」と言わざるを得ず、新しい日本を見ることはなかった。こうして、通訳なきまま日本を訪れる外国人旅行者たちについて、柳は以下のように手厳しい評を述べる。

日本へやってくる外国人のほとんどが伝道師気取りというのは、至極不幸なことと言わねばなりません。彼らは私たちの前に現れるや、説教をし、教えを垂れ、あまつさえ教育しようとし、愛情をもって私たちの心のなかに住み込もうとする人など、ほとんどいないのです<sup>1</sup>。

そうしたなかで、若きバーナード・リーチは、ハーン同様に説教などしようとし、それゆえにみなに愛され、「暖かい目で東洋精神を学び、それを自分の芸術で表現している」ことを柳は特記したのだった。そしてリーチこそは「私たち若い世代の心と行動の片鱗をとらえた一人」と期待を寄せつつも、「まさにその思想が成熟しつつある途中で」、日本を去って中国へ旅立ってしまったと残念そうに記すのである。

柳の見立てに従えば、表面的で的外れな観察と批判を繰り返す旅行者がほとんどなのに対して、ハーンとその愛読者であったリーチのような理解者は圧倒的に少数ということになるだろう。この手紙の宛名であるスコットが、柳のいう「伝道師」であることはいままでのまもない。スコットによれば、日本人は、英国が正義の戦争を行っていることが分かっていないと、『ジャパン・アドヴァタイザー』紙などから関連する記事を柳に送ったのだという。その時、繰り広げられていた第一次世界大戦において、非人道的な軍国主義国家はドイツであり、英国は人道主義の立場から立ち上がったというのである。正義の戦争自体に否定的な柳は、そうした託宣に強く反発したのである。

その露骨な態度から想像がつくように、スコットは、在日英国大使に依頼されて、反独親英のために宣伝活動を行った人物である。1915年の6月頃、スコットを紹介したのはリーチであるが、柳のいうとおり、当時のスコットは日本へやってきた「非戦論者」のジャーナリストであった<sup>2</sup>。宣伝要員となったのは在日グリーン英国大使の報告によれば1916年の3月からというので<sup>3</sup>、柳の手紙から一ヶ月後のことだが、既に大使からなんらかの接触があったのかもしれない。以降、スコットは、三月号の『太陽』に掲載された浅田江村「日英同盟の過去と将来」に批判し

<sup>1</sup> 『柳宗悦全集』第21巻上(筑摩書房、1989)、p.651(引用者訳)

<sup>2</sup> 『柳宗悦全集』第21巻上、p.186。スコットと柳の関係については、既に Mari Nakami, 'J. W. Robertson-Scott and his Japanese Friends', pp.166-179 in Ian Nish (ed.), *Britain & Japan: Biographical Portraits*, vol.2 (London: Japan Library, 1997)があるが、残念ながら柳田との関係は触れられていない。なお本稿では、日本滞在のころからの慣用に従い、ロバートソン・スコットではなくスコットと表記する。

<sup>3</sup> Ian H. Nish, *Alliance in Decline: a Study in Anglo-Japanese Relations, 1908-23* (London: Athlone Press, 1972), p.169.

て、ジャパン・アドヴァタイザー社から『日本、英国及世界』というパンフレットを4月10日に刊行し、さらに12月にはドイツの戦争犯罪を扇情的な挿絵とともにふんだんに書き立て『卑劣な兵士 (*Ignoble Warrior*)』(1916)を丸善から刊行するなど、旺盛な宣伝活動を繰り広げる。柳はというと、12月18日付けのリーチに宛てた手紙のなかで、昨日、スコットがやってきて「彼の計画のことでずいぶん話し合った」ものの、あまりに現実的なスコットとは理念が違いすぎ、どのようにすればよいのかリーチに助言を仰いだ<sup>4</sup>。『卑劣な兵士』の印刷は12月15日、発行が18日とあるので、出版間近の自著についてスコットは柳に何らかの宣伝を要請したのだろう。送られた『卑劣な兵士』を読んだ柳は、ドイツをおとしめ、聖戦という英国の大義名分を訴えるあまりの内容に、以降は絶交も辞さない<sup>5</sup>と、12月23日付けのリーチに宛てた手紙で興奮した調子で報告している。したがって、スコットによる露骨な反独親英の宣伝交渉は決裂したことになる<sup>5</sup>。

### スコットと柳田国男 『是でも武士か』と『新東洋』をめぐる人脈

なお、この『卑劣な兵士』は英語の原文のあと、後半に日本語訳が付いている。柳田の高弟である大藤時彦が「柳田国男の翻訳」(1965)で回顧したように、その部分を『是でも武士か』と名を伏せて翻訳したのが当時、貴族院書記官長だった柳田国男である<sup>6</sup>。大藤によれば、ある日、

ロバートソン・スコットの夫人が先生を訪れてこの本の原稿をしめし、たれか翻訳をしてくれる者はないかとたずねた。先生は適当な人を推薦するのも面倒と思われたか名前を出さないという条件なら自分が引受けるといって訳されたのである。これはもちろんスコット夫妻と先生との友情があったからである<sup>7</sup>。

と記している。柳田の『故郷七十年』での回想によれば、そもそも彼が初めてスコットと会ったのは、新渡戸稲造宅での郷土研究会で、1915年の夏頃のことだという。おそくとも6月9日の郷土会には会っていたらしい<sup>8</sup>。いずれにせよ、リーチを介して柳がスコットに会ったのとほぼ同時期である。そしてスコットは、1915年の柳田のいくつかの旅行に共に参加している。のみならずスコットは、1916年の秋、『卑劣な兵士』の仕上げにあたって、柳田に助言を仰いでいる<sup>9</sup>。スコットは日本語ができなかったので、日本語版に付された付録の作成などにあたって、日本の事情に明るい協力者がいたことは確実なので、それは柳田であった可能性が高い<sup>10</sup>。

<sup>4</sup> 『柳宗悦全集』第21巻上, p.653.

<sup>5</sup> 『柳宗悦全集』第21巻上, pp.652-653.

<sup>6</sup> この事実の重要性にいち早く注目した研究の一つがロナルド・A・モース『近代化への挑戦—柳田国男の遺産』(岡田陽一, 山野博史訳, 日本放送出版協会, 1977)であ。同書 p.76 を参照。

<sup>7</sup> 大藤時彦「柳田先生の翻訳」, 『現代日本思想体系』筑摩書房, 月報 26(1965).

<sup>8</sup> 船木裕『柳田国男外伝 白足袋の思想』(日本エディタースクール出版部, 1991), pp.132-133.

<sup>9</sup> 船木『柳田国男外伝 白足袋の思想』, p.135.

<sup>10</sup> 船木『柳田国男外伝 白足袋の思想』, pp.157-158. 同書 p.155 では、柳田が丸善の顧問であった内田

しかし、スコットと柳のやりとりからうかがえるように、スコットは柳田以外にも多くの人々に参加を呼びかけており、協力の程度の差はあれ、友人や情報提供者が複数いたと考えられる。そうした幅広い人脈をうかがわせるのが、『卑劣な兵士』の刊行から半年ほどして、スコットが創刊した日英両語の月刊誌『新東洋(英語名 *New East*)』である。1917年6月から1918年12月まで続いたこの月刊誌もまた、英国の外務省が支援した宣伝媒体であった<sup>11</sup>。ただスコット自身が雑誌のモットーを「東洋と西洋を隔てる真の障壁は、倫理への双方の不信であり、不信に思っているのは相手だけだ」という思い込みである<sup>12</sup>と掲げているように、反独宣伝は控えめで、全面に出ているのは日英親善である。そのためであろう、『卑劣な兵士』を読んで絶交を考えた柳も寄稿しているほか、リーチや志賀直哉、鈴木大拙など、柳田や新渡戸はもちろんのこと錚々とした人士が、日英の政治家に混じって寄稿している。

プロパガンダという点で興味深いのは、秘書がアメリカ時代の「野口米次郎夫人」ことレオニー・ギルモアであり、副編集長がヒュー・バイアスであったことだろう<sup>13</sup>。野口米次郎は、『卑劣な兵士』の刊行まもない1916年12月31日付けの『ジャパン・タイムズ』に日英同盟批判を寄稿しており、英国インド省文書に残された1917年2月28日付けの「外国新聞日報(Daily Review of the Foreign Press)」にはその詳細な要約と引用が掲載されている。末尾には「野口氏は論説家というより詩人として知られているが、その著作は不備が散見されるにもかかわらず、そしてそれは英語の著作の場合、特に顕著ではあるが、日本の世論にはかなりの影響力をもっている」と要注意人物のコメントがあり、3月15日付けで日本関係ファイルにまわすよう指示が手書きで書き込まれている<sup>14</sup>。一方、ギルモアは野口のアメリカを去ってから息子のイサムとともに来日したものの、すでに野口は別の女性と家庭を営んでおり、英語の教師をして糊口をしのぐしかなかった。秘書を依頼したのは、経済的な事情だけではなく、こうした経緯をふまえてのことだったのかもしれない。なお、イサムがアメリカの学校に向かうのは1918年の夏である。

その翌1919年の5月に、野口米次郎はインドから詩人ジェイムズ・カズンズを慶應義塾大学の教員として招いている。カズンズはインドの自治運動と関係が深い神智学協会の会員であったため、英国政府には来日当初から要注意人物として報告されていた。実際、カズンズはわずか10ヶ月ほどの滞在で広い人脈を築き上げ、インド独立運動を支援していた黒龍会の英文雑誌『エイジアン・レビュー』(1920-1921)の顧問となるほか、1920年2月には神智学協会の東京支部を設立している。バイアスとは、早くも来日して一ヶ月後の1919年の6月にポール・リシャール

---

魯庵を介して企画が持ちこまれた可能性を指摘している。内田は、『太陽』の1914年10月号「German Peril」以来、汎ゲルマン主義を批判する一方で、ポスター宣伝の有効性も力説していたのでその可能性は高い。たとえば「ブランギンのポスター一枚が一軍団以上の威力を発揮したのは英国人が感謝し且誇る処だ」と述べている。なお、リーチは英国でエッチングを学んだが、その師がブランギンだった。また柳ほか白樺派はリーチのエッチングを好んだが、ブランギンには冷淡だった。詳しくは橋本順光「ブランギンの日本と日本のブランギン」『ジャポニズム研究』(30), 2010, 88-95を参照。

<sup>11</sup> Nish, *Alliance in Decline*, p.230.

<sup>12</sup> J.W. Robertson Scott, *The Foundations of Japan: Notes Made during Journeys of 6,000 Miles in the Rural Districts as a Basis for a Sounder Knowledge of the Japanese People* (London: John Murray, 1922), p.xii.

<sup>13</sup> Nakami, 'J. W. Robertson-Scott and his Japanese Friends', pp.171.

<sup>14</sup> India Office Library Records, L/Pts/10/578.

を交えて夕食を共にしている。リチャールは、神智学に理解があっただけでなく、黒龍会の雑誌『亜細亜時論』にも寄稿しており、後にカズンズとリチャールはその英語版姉妹誌『エイジアン・レビュー』で共に協力することになる関係である。バイアスと会うしばらく前に、リチャールは、パリ講和会議で人種的差別撤廃提案が否決されたことに伴い、「先ず亜細亜聯盟を実現せよ」という記事を『亜細亜時論』の5月号に寄稿しており、カズンズは自身がいう「極東で最も重要な英字新聞ジャパン・アドヴァタイザー紙の編集主幹」になんらかの働きかけを行ったとみるのが自然だろう<sup>15</sup>。たとえば、カズンズはリーチや柳とも親しく交際していたが、二人の共通の友人で、柳のリーチ宛ての書簡にもしばしば登場するインド人陶芸家のグルチャラン・シンは、カズンズの感化をうけて神智学の会員になっている<sup>16</sup>。当時の東京を考えれば、英語が堪能で社会的な発言力もある知識人となると、狭い社会ゆえ重なりが生まれるのは当然なことではあるが、柳とリーチの周りでは、宣伝と対抗宣伝がかくも活発に行われていたことになる。

### バーナード・リーチの報告書「日本における工芸について」

その点で、実はリーチもまったく無縁というわけではなかった。日本に工芸(industrial art)を振興させ英国での販売を促進するため、工芸の概観とサンプルの提出が求められた際、再び来日していたリーチは報告書を提出している。創設されたばかりの英国海外貿易部(Department of Overseas Trade)からの1919年3月29日付けの問い合わせに対して、在日英国副領事のG・H・フィップス(Phipps)がリーチに協力を要請したと思われる。フィップスは、貿易部の経理担当官(comptroller-general)に宛てた1919年11月17日付けの報告書のなかで、日本における工芸の現状と教育組織について概略を説明したあと、リーチという最適な人材による「現代日本における工芸の位置と、西洋からの需要に対応できる可能性について」報告書を付しており、そこにあるようにサンプル購入費用として50ポンドを供出してほしい旨を記している<sup>17</sup>。

その「日本における工芸について(Industrial Art in Japan)」と題された添付の報告書のなかで、リーチは東洋と西洋とでは工芸の位置がまったく異なることを前置きした上で、英国からの粗悪な輸入品よりも日本製の洋風家具の方がいまや優れつつあること、したがって趣味のいい英国製の輸入と展示が必要である意義を認めている。と同時にリーチは、機械化と商業化の波に翻弄されない日本古来の工芸品には見るべきものが多く、英国に紹介する価値が大いにあることを強調している。英国の趣味と需要に応じて、おそらく安価な日本製工芸品を大量に生産できな

<sup>15</sup> James H. Cousins, *New Japan* (Madras: Ganesh, 1923), p.85. この日本滞在記にはバイアスとの交流がしばしば記録されている。回顧録によれば、カズンズは友人の音楽家ヘンリー・アイクハイム(Henry Eichheim)とともにバイアスと熱海旅行へも行ったらしい。James H. Cousins and Margaret E. Cousins, *We Two Together* (Madras: Ganesh, 1950), p.359. もっともバイアスは、1930年代から反日派として活動することになる。

<sup>16</sup> 詳しくは、橋本順光「アイルランド神智学徒のアジア主義? ジェイムズ・カズンズの日本滞在(1919-1920)とその余波」, 藤田治彦編著『頭脳循環プログラム報告書 アジアをめぐる比較芸術・デザイン学研究一日英間に広がる21世紀の地平一』(2013年3月), 27-43を参照。

<sup>17</sup> Public Record Office, FO 262 1410.

いかという求めに対して、頭からその意義を否定することなく、日英双方の工芸の質が向上するような関係を作り出そうとしているともいえるだろう。事実、リーチは貿易部に全面的な協力を約束しており、翌 1920 年の夏に英国へ帰国する予定だが、50 ポンドあれば十分にサンプルをそろえられること、購入依頼者としてリーチ自身が個展を開いたギャラリー流逸荘の仲省吾なら、信頼がおける上、日本にいる間は助言ができることを約束している。こうした工芸や輸出振興を管轄とした部門は農商務省にもあるが、信頼できる個人を推薦した理由として、リーチは以下のように述べている。

私はそして日本の友人たちも、こうした官僚組織や公的機関を通して海外貿易部が望むような成果は得られないと思っている。そのような手段によって美の水準というものが上がることはまずない。もっと現場に入り込んで労力と工夫とを注げば向上するとは思っているのだが、私が経験した限り、日本のお役所にはまさにこの点が欠けていると言わざるをえないからだ。ここで私は率直な感想を記しているのであって、偏見や利権ゆえに歪曲しているわけではけっしてない。私自身は、真理と美とを愛する独立独歩の日本人の声に耳を傾けたいと思っはいるのだが、英国と日本の美術を真に振興できるのであれば、できることがあれば喜んで協力したいと考えている....<sup>18</sup>

「真理と美を愛する独立独歩の日本人」というのが、仲との関係があまりよくなかった柳を指しているのかどうかは確かめようがない。しかし、リーチの逡巡は明らかだろう。周囲の日本の友人を欺くようで気が引けるが、俗悪な商業化を黙視するよりは、日英にとらわれない「美」の向上のために、あえて協力する方が結果的に友人のためにもなると考えたと思われる。

#### 敬愛するハーンへ スコット、柳田、柳の交錯

こうした次善の策として諜報や教育への協力という点は、実はスコットも同じだった。『プロパガンダ戦史』が述べるように、スコットは「イギリスの宣伝秘密本部から派遣された宣伝工作員」<sup>19</sup>ではない。彼は 1915 年から 1919 年まで日本に滞在しているが、一時的にスカウトされたジャーナリストであった<sup>20</sup>。たしかにボーア戦争に反対して退社した経歴や、日本の農村を調査しにやってきたという目的は隠れ蓑として注目され、白羽の矢に立った可能性は考えられるだろう。しかし帰国後、スコットは当初の目的通り、日本での調査をもとにして大作『日本の基礎』(1922)を刊行している。示唆に富むのは、この刊行が、1921 年のワシントン会議で日英同盟の更新が見送られ、四カ国条約が締結された翌年であることだ(もっとも、同盟自体が失効したの

<sup>18</sup> Public Record Office, FO 262 1410. これが報告書の末尾であるが、おそらく以下は割愛されて貿易部に送られたのだと思われる。

<sup>19</sup> 池田徳真『プロパガンダ戦史』(中央公論社, 1981), p.85.

<sup>20</sup> 船木『柳田国男外伝 白足袋の思想』, p.150. 船木はスコットの執筆活動からの指摘であるが、これは外交文書から宣伝活動時期を指摘した前掲のニッシュの研究とも一致している。

は1923年である)。そうした事情ゆえにだろう、スコットは『新東洋』の資金源はじめ、宣伝活動に関わっていたことをはっきりと序文で記している。そもそも遅延した理由について、「あの有名な反日英同盟のキャンペーンという、いまもって十分に説明のつかない事件が東京で勃発し、まもなく私は自分の研究を中断して、急を要する重要な任務を行うよう強く求められたのだ」と、英独の宣伝工作に巻き込まれたことをあからさまに示唆して弁解している<sup>21</sup>。それに続けて「私は日本の難題や欠点についても執筆していたし、そのうえ、当時、親日家であることをほとんど知られていなかったのも、じかに日本人について接して学ぶことができた」とも書いている。これは1916年から翌年にかけての『卑劣な兵士』を中心とするプロパガンダ活動を指してのことと思われるが、これは行き違いにより論争し、むしろ胸襟を開くような関係を築けたという点で、ひょっとすると柳のことが脳裏のどこかにあったからかもしれない。というのも、柳の激しい批判に相違して、スコットはどちらかといえば日本の心を学ぼうとしたハーンの系譜に立つ存在だったからである。スコットの『日本の基礎』は、背表紙に「日本之真髓」と日本語で縦に記されており、背表紙に日英のタイトルが併記されている点では、『卑劣な兵士』に「是でも武士か」と書かれているのと共通している。しかし、「是でも武士か」という扇情的な意識に比べて、「日本之真髓」という邦題は似て非なるというべきであろう。日本語が不自由なスコットに、この邦題を提案したのは、またもや柳田だったのだろうか。柳田もまたハーンを敬愛していたが、「日本之真髓」というのは、ハーンの『心(Kokoro)』(1896)やそれに収録された「日本文化の真髓(Genius of Japanese Civilization)」を意識してのことだったのかもしれない<sup>22</sup>。

実際、スコットはハーンを敬愛していた。スコットの農村調査のほとんどは柳田がつきそって協力していたのだが<sup>23</sup>、1915年の秋、松江でハーンの旧宅を柳田とともに訪れた時のことを記したあと、ハーンは「詩的にすぎる」「正確でない」といった批判に対して以下のように反論している。

たしかにそうかもしれない。しかし、重要なのはハーンのと姿勢が実に正しかったということだ。ハーンは、単なる「事実」のコレクターとなることなく、上から下々に接するような態度もとらなかった。ハーンは日本に対して、謙虚かつ熱心に、想像力と共感をもって接した。人から人へ通訳しわかりあえるようにするのは、こうしたごくまれな男女にのみ可能なことなのだ<sup>24</sup>。

柳の感化かどうかはともかく、こうしたハーン理解は、1916年2月に、柳がスコット宛の草稿の手紙で対比した旅行者と理解者とまさに同じものといえる。ほかにも柳についてスコットは、いみじくも「隔絶の観念」と題された一章のなかで、柳へのインタビューも含めて詳しくその思

<sup>21</sup> Scott, *The Foundations of Japan*, p.xi.

<sup>22</sup> もっとも“Genius of Japanese Civilization”が「日本文化の真髓」という訳題で一般化するの、第一書房版の『小泉八雲全集』第4巻(1927)以降かと思われる。

<sup>23</sup> 船木『柳田国男外伝 白足袋の思想』, pp.133-135 および pp.165-166.

<sup>24</sup> Scott, *The Foundations of Japan*, p.254.



想を紹介している。仏教もキリスト教もその理念においてはさして変わることなく、「東洋と西洋は、隔絶に掛けられた橋の上ではなく、そこに隔絶があるという観念を破壊することで出会うことが可能になるはずだ」と引用し、ちょうどスコットやリーチに宛てて展開していた柳の持論が説明されているのである<sup>25</sup>。続けて、西洋からの観光客に対する苦言についても以下のような引用がある。

日本人の倫理意識についての間違った印象は観光客によって広められている。たとえばパリの観光客たちが、自分たちの期待するものをガイドたちに案内してもらっているのと同じことだ。

そもそも東京にやってきて私たちが不道德だと話す西洋人は、夜の東洋の都会で、外国人女性が誰からも声を掛けられることなく、まずもって安全に家まで帰ることができるという事実になぜ驚かないのだろうか。そもそも日本人はとても親切な民族だ。道德の観念というものはないかもしれないが、それは不道德ということではない<sup>26</sup>。

ここでは、柳がスコットに投函しようとしてとどまった先の手紙と同じ内容が、機知を交えながら冷静に語られている。ただスコットの注記によれば、こうした柳との会話は1915年の夏に行われたという。したがって、1916年2月あるいは12月に反独宣伝をめぐる行き違いの前ということになるので、単に柳は持論を激しい調子で1916年2月の手紙で書いただけなのかもしれない。しかし、その2月の手紙は、キップリングやロティを持ち出すなど噛んで含めるように書いているところからも、およそ上記のような会話をしてからあととはなかなか考えにくいところがある。詳細は不明ではあるが、1916年12月に『卑劣な兵士』を読んでスコットに憤慨したあと、二人が和解したことだけは確かなことといえる。柳との対話は1915年夏のことだったと記した同じ注において、スコットは、最近、柳から受け取った書簡を引用しているからである。1919年に柳が「朝鮮での失政」、つまり三・一独立運動に対する朝鮮総督府の弾圧に激しく抗議したことに触れたあと、柳は目下、朝鮮民族美術館の設立に向けて尽力しており（設立は1924年）、そこを「朝鮮人と日本人の出会いの場」にすることで、「芸術によって朝鮮問題の解決」を図りたいのだというのである<sup>27</sup>。したがって、こうした私的なやりとりが1921年あたりにみられたところから考えて、スコットは柳に経緯と事情を話し、その後、柳も何らかの追加取材に応じたのかもしれない。柳の朝鮮半島への共感について私信を引用するなど、自由に柳の主張を書き記せるようになったのは、日英同盟の失効決定を経て、政治的な配慮をする必要がなくなったことが大いに考えられるだろう。そして、対独宣伝をめぐるスコットは柳らと忌憚ない議論を重ねることで、柳のいう旅行者ないし伝道師という視点に対して、同じく批判的になったのではないだろうか。

<sup>25</sup> Scott, *The Foundations of Japan*, p.101.

<sup>26</sup> Scott, *The Foundations of Japan*, p.102.

<sup>27</sup> Scott, *The Foundations of Japan*, p.104, note 1.

## 「過去の吾等」と「前途有望の子供」 柳からスコットへ

その傍証として考えられるのは、スコットが序文で引用した図版である。詳しい説明はないが、日本について苦言を呈したからこそ日本人をよく知ることができたという序文の直後で、スコットは「過去の吾等」という『新公論』から転載した図版（図 1）を引用している。これは 1918 年 9 月号の『新東洋』でも引用されているので、そこからの再掲であろう。この図はスリッパをはいた医者のような洋服の西洋人男性が、椅子にも座ることができない和服の日本人の幼児に、「文化」と書かれた滋養分らしきものを与えている。おそらくその幼児は事態がわかっておらず、自分に与えられているものが何であるかもあまりわかっていない。西洋列強のいうがままにその文明と文化を、あたかも医者の方か、父からの命令のように無我夢中で咀嚼してきた時代ということなのだろう。ここには、そんな時代がもはや過去になったという日本人の自負と、いまなお父権的に振る舞おうとする西洋人への悪意に満ちた皮肉な視線がうかがえる。『新東洋』の時と同様に、キャプションが「往時の日本」と英訳されているので、これが現在の日本ではなく、日本を子供扱いしてきた西洋への風刺であることを、スコットは明らかに理解している。そして、この内容はまさしく柳がスコット宛の手紙で書いた内容とも一致する。『卑劣な兵士』において、柳田あたりの協力を得て日本に関する付録を充実させたスコットであるので、これもおそらくはそうした協力あつてのことであろう。この風刺画は「過去の吾等」という題名が理解できないと意味をなさないからである。

そして、この西洋人男性の姿にスコットは自分の戯画を読み取ったのではないか。先に大藤の回顧を引用して、スコットの『卑劣な兵士』は、夫人が柳田のところを持参したのがきっかけと記したが、その夫人ことエルスペット (Elspet) には画家の妹がいた。英国出身で、浮世絵に学び、アジアの社会や風俗を多くの木版画で描いたエリザベス・キース (Elizabeth Keith) である。キースは姉を頼って 1915 年に来日し、1917 年にスコットが『新東洋』を創刊したときに、そこにしばしば風刺画を寄せた。キースが『東側の窓 (Eastern Windows)』(1928) というアジアスケッチ旅行記を刊行した時、柳田はその書評で以下のように回顧している。

以前スコット君の「新東洋」という雑誌に、この著者が折々スケッチを載せて居た時には、あなたの描く日本人はあまり眼が釣り過ぎて居ていけない。もうあなたの画は決してほめてあげないなどと、私はよく冗談をいったものであった<sup>28</sup>。

これはキースが、日英の名士たちを滑稽な姿で風刺した石版画のことを指している。実際、それだけ人物の特徴をとらえたキースの肖像画は面白いことで評判になり、徳川家達の好意により東京の華族会館で展示会が開かれることになった<sup>29</sup>。1917 年 11 月 22 日から 24 日までの 3 日間、

<sup>28</sup> 『柳田国男全集』第 7 巻(筑摩書房, 1998), p.234. 『東側の窓』

<sup>29</sup> モース『近代化への挑戦—柳田国男の遺産』, p.238, 注 25.

傷病兵を救助する義援金を募集する展示会として、徳川が社長を勤める赤十字社が主催したという<sup>30</sup>。展示された風刺漫画は、『笑って我慢して (*Grin and Bear it*)』という画集にまとめられ、スコットの新東洋社から出版され、会場でも販売された。そのなかに描かれた日英の名士たちは、いわゆる外見を誇張する似顔絵とは異なり、顔自体は写実的ながら、仮装大会のように突飛な出で立ちで組み合わせられている。スコットを宣伝要員として雇ったグリーン英国大使はインドのラジャ風の衣装をまとった姿であり、柳田はないものの新渡戸は少女の振り袖姿、バイアスは「新東洋」と書かれたタンバリンを打つ、おそらくボランティアの女性として描かれている。こうした仮装は、おおむね社会的階層の上位の者が下々に扮装するところに面白みがあり親しみを感じさせるものだが、ここでも反感や悪意ある組み合わせはなく、どれも好感がもてるような工夫がこらされている。『卑劣な兵士』では、オランダの画家ルイ・レーメーカー (Louis Raemaekers) による反独宣伝の絵が良くも悪くも衝撃的に過ぎたのに対して、こちらは日英親善と同時に、傷病兵の救出により聖戦を印象づける宣伝だったのだろう。事実、『卑劣な兵士』でドイツによる蹂躪が強調されていたベルギーの大使は、ドラゴンを馬上から槍で突こうとする聖ジョージの姿で描かれており、キャプションには「正義は力なり」と、ここだけ笑いではなく「我慢」が強調されている。そして、スコットもまたキースによって描かれている (図 2)。そこでは和服姿のスコットが、雑誌 *New East* に挟まれた赤ん坊をおぶさっており、「前途有望な子供」とキャプションが付けられている。前年に創刊されたばかりの『新東洋』という雑誌を乳児に見立てて、日英親善の有望な将来を育む母スコットということなのだろう。しかし、乳児は明らかに「眼が釣った日本人を思わせる顔であり、それゆえ大人の英国が和服姿で日本を懐柔しようとしているという見方もできなくない。ここに柳が批判した伝道師としての西洋人を読み込むことは難しくないだろう。こんなふうにキースが描くように日本を「前途有望な子供」として扱ってきた自身の『新東洋』での宣伝活動について、それを半ば自嘲するところから、スコットは、先の『新東洋』で掲載した風刺画 (図 1) を再度、引用したのではないか。彼自身が序文で述べたように、日本に無理矢理教え込む「文明化」にも似た宣伝活動が終了し、それが「過去」のものになったという解放感もあったのかもしれない。

## おわりにかえて 柳と柳田の「隔絶」

一方、柳田はキースの『東側の窓』に触れて、そこには『新東洋』のころのような「眼をした東洋人」はあまり出ていないと指摘し、長く東洋にいる間に「我々と同じ様に見えて来た」のだろうと記している。そうして「全体西洋人はいつも自分の家の東の窓を明けて我々を」見ようとするが、この本は「我々の家の西側の窓の外から、にこにこ笑いながらのぞいて見て居る」と巧

<sup>30</sup> 山田摩耶「エリザベス・キース『苦笑して我慢して』—アジアに魅せられた外国人絵師」, *Medianet* (16), 2009, p.52. 以下、キースについては、2011年11月26日に開催された日本比較文学会関西支部第47回関西大会シンポジウム「朝鮮半島の表象と日本社会—1920年から1930年代の美術を中心に」での発表「趣旨説明あるいは日朝交流史に対する補助線をデッサンする試み」と、一部重複していることを断っておきたい。

みに、キースの木版画の特質を言い当てている。これはまた柳の述べた西洋からの旅行者に対する反発とまさに通底するものである。ただキースが、アジアのとりわけ朝鮮半島の社会と人々に「深い感動を受けた」ことは記事からも木版画からもうかがえるとしつつ、柳田は、

政治の方面には女らしくわざと触れまいとしているが、あの古風な沈んだ美しい単色の調和から、静かに酌上げようとして居る過去文化の哀愁のうちには、大きな論文でも述べ切れなような、込めた問題の片端がうかがわれるように感じられる。

と、日韓併合で叙勲を受けた彼もまた<sup>31</sup>、この問題にはわざと触れまいとしている。ここにスコットという共通の友人を持ちつつ、好対照な交際をした柳と柳田の「隔絶」が如実にあらわれているといえるだろう。いうまでもないことだが、宣伝や諜報というのは、特別な諜報員のものだけでなく、スコットやリーチのように、情報提供や支援を受けての執筆活動といった灰色の部分をもっている。この小論は、柳の未投函の手紙とスコットの引用した図版との間に、リーチや柳田との交友の関係によって、四人の交錯を描き、そこに「込めた問題の片端」をうかがおうとした試みにほかならない。

本報告書は、このように何気ない旅行記や滞在の記録を読み直すことで、そんな問題の一端をとらえようとした試論集である。イギリスの女性教師、ブルワー・リットンの犯罪＝流刑小説、幸田露伴と郡司成忠の北進論、帝国日本の女性教師ネットワーク、鹿子木員信のインド追放など、主題が雑然としている感は否めないが、19世紀から20世紀にかけて日英の移動と衝突が引き起こした移動の記録についてなにがしかの新しい観点が導入できればと願っている。ちょうど柳が戒めたように、観光客は自分の見たいものを都市から見ようとする。それは研究者が資料を自分のみたくて読み解いてしまう陰謀史観の危険性と隣り合わせではあるだろう。このささやかな中間報告もまた、そうした叱正を買うかもしれない。ただ、もしそこからスコットと柳のような対話が生まれるとすれば、これに勝る喜びはない。多くの人々の教示と意見を乞う次第である。



図1 スコット『日本の基礎』序文から



図2 エリザベス・キース「ロバートソン・スコット」

<sup>31</sup> 船木『柳田国男外伝 白足袋の思想』,p.102.